

海底に月を撈う

琉游舎

戸井

出琉

一、ダメ出し

冬の掃除はつらいものですね。とは言っても掃除用具が箒と雑巾から掃除機とモップに変わったことで、小学校時代の教室掃除に比べれば随分と楽になりました。琉游舎も毎週木曜の朝は二時間ほどかけて内と外の掃除です。床はモップで水拭きですがその他は雑巾で拭かなければならないので、手が凍り付くような冷たさ。残り水で外のウッドデッキをブラシでこすっていたら、たちまちシャーベット状になってしまい、危うく滑って転倒するところでした。

先日テレビで目を疑うような光景を見てしまいました。オリンピック・パラリンピックボランテニア研修のニュースの中に、足で雑巾を踏んで体育館の床を拭く人たちが映し出され、その掃除のやり方に思わずダメ出しをしそうになりました。雑巾は手にもって拭く物、足で踏んづけて拭く物ではありません。と思っていたのですが、研修の中で全員がその様な床の拭き方をしていたので、なんらかの事情があるのだと自分を無理に納得させました。私も小学校時代そんな拭き方をしていたことを思い出します。先生のいないときはたまに足雑巾していたのです。嫌々掃除をしていたからなのは確かで、いずれにしても見つければ間違ひなく怒られていたはずです。お行儀の問題なのか、足で踏む行為を忌避する精神の問題なのか、ダメなことを恥とし恐れ避ける感情は理屈ではないはずです。

私はたまに扉を足で開け閉めしてしまうことがあります。見つかると「便利な足ね」と妻には即刻ダメ出しされます。足使いに對する共有の倫理やタブーがあればこそそのダメ出しは素直に受け入れ改善します。だから今度は誰も見てないところで便利な足を使います。

二、美しい日本語

テレビを見ているとここずつと気になることがあります。いわゆる「ら抜き言葉」というものです。インタビューを受けた人から抜き言葉を使うと字幕スーパーでそれが必ず訂正されるのです。たとえば「毎朝六時には起きれますよ」という音声に「毎朝六時には起きられますよ」というスーパーがつくということです。私が見ている限り老若男女有名人名まで、誰かまわらずインタビューの類いでスーパーが入る場合は必ず訂正されています。私自身ら抜き言葉は小学生の頃から文法的に誤った使い方だといわれ続けて五十年以上経っています。が、ら抜き言葉を使っていないという確信は全くありませんし、ましてや人が使ったら抜き言葉を訂正するなどという失礼なことは一回もしたことがありません。

言葉は時代とともに変わっていくものです。特に仏教用語に関しては正反対の意味になることを何度か「狂言綺語」で、言葉の変遷理由と合わせて述べてきました。テレビが日本

語の番人を持って任じているとしたら「ら抜き言葉」の訂正よりもっと正すことがあるような気がするのですが、どうなんでしょう。

現在「ら抜き言葉」を完全に使わずに話せる人はごく少数のような気がします。美しい日本語に固執する一部の人からすると耳障りなのでしょうが、五十年以上言い続けても正されないなら、それはもう美しいとは言えなくても正しい日本語ではないでしょうか。

美しい日本語と美しい日本。その様な時がいつの時代にあったのか分かりませんが、そんな時代はなかったのにそれをさもあつたかのように言うことの方が「ビミョ〜」で「チョーやば」のような気がします。

三、変だなあ

変だなあと思ったことを、何が変なのかよく分からないままに放っておいても気にならないのは、年のせいなのでしょう。変だなあと感じたことを追求する根気がなくなつたのか。変だなあと思つても次の瞬間何を変だなあと思つたのかを忘れてしまうほどどうでもよいことだったのか。長年の経験で変だなあという気持ちが無駄な義憤へと膨らむ前に、思考シャットアウトの自己防衛本能が働いてしまうのか。特に最近は変だなあと思う間もなく「あれ！何を変だと思つたんだろ」となることも増えました。これは明らかに年のせいです。

「変だなあ」を行動に変えて異議を唱えることは若者の特権で、大人になることはその異議の矛先を納めて、社会という曖昧模糊とした境界線の中に身を丸くして納めていくことなのでしょう。学生の時に暮らしていた寮の壁にはそこかしこに「造反有理」の言葉が書き殴られていました。毛沢東の革命を肯定する言葉です。でも寮のそれは、モラトリアム学生の掛け詞にしか過ぎず、若者は就職という大転換を経て家族や会社、社会のために働いて尽くすことで一般的な日本人の大人になっていきます。もちろん私もその典型的な日本の大人のひとりです。この転換は挫折を伴うでしょう、しかしそれは若者たちに社会的な居場所を与えるための通過儀礼でもあつたのです。

暴走族や学生運動という不器用な方法でしか「変だなあ」を表現できなかったかつての若者たちに比べて、現代の若者の異議申し立ては何と洗練されているのでしょう。ネット空間の中で飛び交わされている匿名性が顕著なその異議の矢は、誰がどんな意図で放つたか相手には分からないため、射手が逆襲にさらされる危険性が少ない、安全地帯から放たれる矢です。それに比べたらかつての方法は「遠からんものは音に聞け、近くば寄つて目にも見よ」という武士の「名乗り」の口上のごとく、自分の姓名・身分・行動の正当性などを満天下にさらす泥臭い方法でした。今のネット住人のように、安全地帯において異議の矢を放ち続けられたら、挫折を味あわずに済んだでしょうにね。

先日のニュースに、東京五輪の海外訪問者輸送力増強のために羽田空港への進路を変

更する交渉に、アメリカがやっと思いで頂けるようだとありました。言うまでもなく日本の空は日本国のものではなくアメリカのものです。空が自分たちのものでなければその下の土地も自分たちのものであるわけがありません。んっ何か変ですか？ 異議を唱える人がいないことを念じて、私は今日も心穏やかに鰻魚祭りに興じたいと思います。

四、第三者

僧侶の立場からすると第三者と言う存在はあり得ません。というのも仏教の根本原理からすれば、全ての存在は「縁起の法」によって成り立っているからなのです。つまり世界の一切は「縁によって起こり」直接にも間接にも何らかのかたちで、お互いは相互依存関係にあるという考え方です。私達は、生きているかぎりそこからひとり超然として、宇宙に起こる出来事に一切関係ないとうそづくことはできないはずなのです。

このごろ都に流行るもの一つに第三者委員会というものがあります。昨年から今年にかけて、組織の暴力事件や不祥事などで頻繁にその存在を耳にします。何かあれば手っ取り早く第三者委員会を立ち上げて客観的な立場で原因を明らかにし、問題点を見極めて改善策を提示するという危機管理の手法です。報告書が出た後の評価はよくそこまで突っ込んだ提言ができたなというものは稀で、大概は、まあここらあたりまでが限界かな、だつて当の調査される側が選んだ「第三者」の報告書でしょう。物足りないけどここらを落とすどころにしておかないとね。費用出す人のことを徹底的に追及するはずはないんだから・・・あたりが世間の納得のしどころのような気がします。

組織の危機を管理する委員会に当の組織が資金提供してしかもスタッフ（もちろん委員の弁護士や有識者先生）も決めているわけです。私の長い会社員生活の中で、仕事はお金を提供する人（依頼者）の望むような結果を対価として提供することで成立していました。依頼者と被依頼者は第三者ではなく、利害関係者です。ましてや私の短い僧侶の経験では第三者という言葉はないわけですから、私にはこの委員会というものはほとぼりが冷めるまでの時間稼ぎのパフォーマンス、出来レースとしか見えないのです。依頼者は興行主でありプロデューサー、委員はスタッフ、危機を招いた当事者たちは主人公に悪役に脇役の役者たち。そして私達は観客に見立てられるでしょう。第三者という名の仲間うちの興行作品を、私たちは無責任に見世物として楽しんでいると考えればこれも一興ですな。

一流パフォーマンスばかり見せられるとたまには温泉場の大衆演劇も見たくになります。最近格好の田舎芝居が上演されました。グラフを「まかした尻拭いを両親（上司）の監視のもと赤の他人（第三者）に子供たち（部下）が拭ってもらっているという学芸会並みの田舎芝居でした。興行主（政府）の評価が高かったのかしら、続編はマイナーチェンジで近日上演されるようですが、楽しみに待っていていいものやらどうやら・・・

五、ふるさと

「ふるさとは遠きにありて思ふものそして悲しくうたふもの」詩人室生犀星の詩集『抒情小曲集』のある詩の冒頭の部分です。この有名な詩は、東京ではなくふるさと金沢で作られた詩、詩人のふるさとへの愛憎相半ばする複雑な思いが込められている詩と言われています。ふるさとはなつかしくも忘れがたいもの。ただいつも温かく迎えてくれる時ばかりではないでしょう。上京して志し半ば孤立無援の若者には、ふるさとはいつそう冷たく自分の居場所がないと感じてしまうことがあるかもしれません。ふるさとは心の傷を癒し甘えさせてくれるだけのところではありません。時には「へこたれるな、甘ったれるな」と叱咤激励し、現実を直視することを自分自身に迫ってくる処でもあるのです。

東京で会社員をやっているころ、仕事上で相手との関係ができればじめると「ご出身はどこら？」と聞かれることがよくありました。私の場合は「生れは浜松、育ちは栃木、本籍は愛媛の松山」と答え、この話題から関係が強まりビジネスがうまくいくこともありました。ところが「ふるさとはどちら？」というような聞かれ方をした記憶はありません。おそらく「出身地」がその人にとっての戸籍的な事実の話とすれば「ふるさと」は冒頭の詩のように個人的な感情の話だからなのでしょう。好悪、愛憎が絡む個人的感情の話に立ち入ることは、ビジネスの場では御法度です。

「ふるさと」という言葉はかように繊細で人それぞれの思いがある言葉のはずです。だから単なるお金欲しさの自治体と物欲しさの都会人の取引に「ふるさと」を冠したネーミングをつけないで欲しいのです。ふるさとも何でもないとどこにお金を払いその見返りに、高価な物を受け取る。しかもどうやらその払ったお金というものは住民税に相当するものらしいのです。税の「受益者負担の原則」や「ふるさとの定義」などというめんどうくさい議論はこの際やめておきます。ふるさと納税という制度によって「ふるさと」が取引材料に使われてしまっていることが問題なのです。「ふるさと」への愛憎の感情もただただ利益勘定があるだけ。「ふるさと」の空洞化がここにあります。

言葉から感情の襞を取り除いていけば最後は薄っぺらな記号に成り果てます。「ふるさと」から個人の思いを除いたその先にあるものは記号化した「ふるさと」。私のふるさと氏家町は十年ほど前「さくら市」と、私にとっては記号化された処となってしまうました。ですから「さくら市」に新たな感情の襞を付けていくことが、かつて「遠きにありて思った」者のふるさと回復方法。しかし未だにPCは「さくらし」を「佐倉市」と変換。残念。

六、自利 利他

誰でも気が進まないことの二つや三つはあると思います。私の場合は寄付とボランティア。前者はお金がないのでしたくてもできないという方が正しいかもしれません。後者は論

理的に語れば語るほど屁理屈に聞こえてしまうので「本能的にボランティアという行為には拒絶反応がある」と言って以下黙秘です。

「自利、利他」という仏語があります。悟りのために修業して自ら利益を得ることと他の人の利益のために尽くすこと、此の両面を備えることが大乘仏教の理想であるという教えです。大切なのは「利他」ありきではなく、まず「自利」があるということです。仏教は理想を説く宗教ではありません。冷徹な人間観察のもとに組み立てられた、現実的な教えです。自分より先に人の為に尽くすという行為が、本当に人間の意志や生理にかなったものなのかを真剣に観察した末に出てきた教えです。一方通行の「与える」「与えられる」の関係ではなく、皆が各々で自利を求めていくと自分の得た利益が自然と周りに浸透し、各々がいつの間にか他利を受け取ることが出来るということ。双方向の関係です。これを仏教用語で「布施」と「回向」。日常の言葉では「お互い様」「相互扶助」ということだと思っています。

最近「布施」の好例をニュースで見ました。医科大学の入試で親が三千万円の寄付金を支払い、大学側が点数に下駄をはかせて、その受験生を合格させたというニュースです。とてもいい話です。医者になりたい受験生とその親がいてお金持ち。大学はその資金で経営が楽になり、国家試験に受かってくれさえすれば、親も病院の跡継ぎができて今までの投資資金を回収できる。そして私学助成金という税負担を私達は減らすことが可能となる。「相互扶助」のほぼ完璧な「回向」の仕組みです。

ところがこの仕組みが気に入らない人たちが大勢いるようなのです。文科省は目の届かないところでお金をやりとりしていることが許せないのでしょう。マスコミは弾き出された受験生が可哀想、お金持ち優遇が許せないという正義と嫉妬の庶民意識を煽っているだけのような気がします。糾弾ではなく「自利・利他」となる解決方法を提出することが肝要。例えば入試要項に寄付金百万円あたり下駄五点履かせますと謳い、大学は私学助成金(税負担)から寄付金の総額を減額して受け取ると文科省に申告するというのはどうでしょう。私は「寄付」や「ボランティア」の一方通行・垂直関係から「布施」や「自利・利他」の双方向・水平関係の方が毎日が楽に生きられるような気がするのですが、そんな白黒が曖昧な生き方が性に合わない人がきつといるのでしょね。

七、令状

漢字は意味そのものを表す文字です。あるものに名前を与えるとき、そこにその人がその漢字を選んだ意図や思いがそのまま表現されてしまいます。どんなにそんなつもりでこの漢字を使ったのではないと言いくるめようと、文字の一字一字が持つ意味はごまかしようがありません。ただそれはその漢字を使う側と受け取る側に共通の良識が要求される限りにおいてごまかしようがないという意味で、そもそも良識も見識もない人たちが一方的にある意図をもって送り出す場合、漢字は意味を誤読させ、人を誤った行為に導き、凶器にもなるとても厄介な表意文字なのです。

最近私たちはある令状を受け取りました。その令状に書かれた指令は勅令に名を借りたある司令官からの命令でした。「内外、天地とも平和が達成されることを願いながら自然災害の多かったこの平成時代を終わりにして、律令時代のように禁令を守り、法令に従順に号令一下、和をもって尊しとするまほろばの大和の国に復古せしめ、仮令（たとえ）希望や花咲かせる平和の時代が幻想のままであろうとも、此の政令に従順であればかならず、令衆生入於美国（衆生をして美しい日本にいらしむべし）」という平和の訓令が発令されたのでした。

平和は訓令によって作られるものではありません。訓令によって作られる平和はある一面的な正義や理念によって作られる平和であり、それは必ずその正義を受け入れられない人々との争いをもたらすでしょう。人の和は指令によって拮げられるものではありません。異なる考えや自由な発想の中から、互いを認め合うことで和が出来上がっていきます。指令によって造られた和は、閉鎖的な輪、排他的なカルトの輪です。「人々が美しく心を寄せ合う中で生まれ育つ文化」は布令によって産まれません。文化は互いの自由な想像力のせめぎあいと認め合いの中で具現化されたものの総称です。令によって達成されようとする文化や平和や希望はどんなものなのか私にはさっぱり想像ができません。誰かわかる人は教えてください。切なる願いです。

朝令暮改は世の常ですが、此の令状は禁足令や箝口令まで敷いて発令したものですから、もはや撤回されることはないでしょう。強権的な言論弾圧の方がまだ分かり易くてよいのですが「巧言令色鮮し仁」。巧みな言葉であらゆる言論機関を使って「巧言」を弄されコントロールされたら、私たち市井の民は「仁」のあるなしを考えるより、万歳をした方が面倒になりません。日本人はこうやって勅令や令旨を騙る、令名高き令兄司令官閣下の命令を古来あきらめとともに繰り返し替えし受け入れてきたのでしょうか。合掌

八、改名

行先を厳密に決めず、泊る場所と往復の交通機関だけ予約してあとは車で行き当たりばったり。そんな旅は思いがけない発見があり楽しいですね。最近は道路地図も見ずにカーナビを頼りに目的地に向かうので、道路標識や看板を見て「えっ？ここはどこ」というような名前に出合うことが多々あります。

先日大隅半島と薩摩半島の気ままな旅にでかけてきました。指宿から開聞岳の美しい姿を眺めながら坊津を目指してドライブしていると、枕崎の手前あたりから標識などに「南九州市」とか「南さつま市」と言う地名が出て来るようになったのです。目的地の坊津は遣唐使船の寄港地や倭寇、薩摩藩の密貿易の拠点として栄え、鑑真和上が上陸した地とも言われる歴史的な地名です。その名前がいつまで走っても出てこないのです。スマホで調べてみると坊津方面は南さつま市に、次の目的地の知覧は南九州市と言う名前になっているではないですか。知覧は言わずと知れた特攻隊の出撃基地があったところ。いずれも地名を聞いただ

けでその土地の歴史と重要さがすぐ思い浮かびます。坊津は南さつま市、知覧は南九州市。この名前に何を思い浮かべるといえるのでしょうか。

名前は過去の歴史を内包し未来を作る指標となるものです。名前を変える場合には過去に対する敬意と未来への責任が必要です。さてこの名前たちはどのような未来を私達に与えてくれるのでしょうか。「さぬき市」「あわら市」「おいらせ市」「ひたちなか市」「まんのう町」「ときがわ町」これらは住民が漢字で書くのは無理と判断したのでしょうか。失礼な話です。でもまだかつての漢字表記は想像できます。では次の名前はどうか？「みどり市」「さくら市」「あさぎり町」「ここはどこ」、あなたは大ーれ。こんな大風呂敷をひろげたものもあります。「つくばみらい市」「南アルプス市」「中央市」「四国中央市」「伊豆の国市」「甲州市」。次はちよつといじましい感じがします。「北名古屋市」「南房総市」「西東京市」探し出したらきりがありません。もしこの名前に関係する人が、この文章を読んで不快な思いを持ったらごめんなさい。これも地域の司令官殿が発令した改名命令ですから、あきらめて受け入れてください。かく言う私の大切なさとはかつての「氏家町」いまの「さくら市」です。歴史も意味も未来への責任も感じられない、ノー天気な名前です。

親から貰った名前を変えることはもつてのほか。ところが私は三年前に「出」から「出琉」に改名するというもつてのほかの暴挙に出ました。暴挙が愚挙なのか快挙となるか。改名された各行政担当者の方、お互い愚挙とならないよう日々努力しましょうね。

九、信ずる心

私は右翼でも左翼でもありません。日本の自然やそこに暮らす人々が好きで、こよなく日本の文化と伝統を愛し、命尽きるまで幸せに暮らしたいと願っているだけの普通の日本人です。ところで改元前後のあのカウントダウンのバカ騒ぎは何でしょう。私が真の右翼であればあのバカ騒ぎには天誅を下します。私が真の左翼であればデモで天皇制打倒を叫びます。でも私は普通の日本国民ですから、天皇が象徴としてわたしたちのためになされた日々の行いに思いを巡らせ感謝し、その時を静かに過ごしました。これが私が右翼でも左翼でもない何よりの証拠です。

私は「象徴としての天皇」を機能から説明するかぎり定義は不可能だと思っています。なぜならこれはロゴスではなく信仰の範疇だからです。天皇は日本人の不幸を自分のこととして引き受けることでその不幸を祓い、幸福もまた喜び寿ぐ。それは日本人の「信ずる心」そのものの存在です。誰もが持っているはずの「何かを信ずる心」のうち、日本人の無意識の層に存在する「信ずる心」の具体的な現れが、天皇なのです。天皇は私たち日本人一人一人の「信ずる心」と一体化することによって、人々の不幸を一身に引き受けて浄化してくれる無限の不幸処理装置であり、幸福とともに喜び祝殿なのです。不幸のブラックホール、幸福のワンダーランドと言えば失礼に当たるのでしょうか。

敗戦後私達の「信ずる心」は現人神から人間天皇に宗旨替えを強制されました。天皇からあらゆる現世的御利益の機能(権力)が剥奪された結果、人間天皇は原初的役割である無意識の「信ずる心」そのものになることができたのです。誰もが平等に無条件に「信ずる心」に寄りかかることができるようになったわけですから、天皇陛下万歳と叫ばなくても、どんな形であれ「信ずる心」への尊敬と感謝の念さえあれば「信ずる心」が私達の目の前の不幸を明日への生きる希望へと浄化してくれるのです。

被災地での天皇と国民のやりとりがそれを如実に表しているでしょう。一億もの「信ずる心」を一身に引き受けたその現身はいかばかりの重圧と疲労にさらされていたのか想像もつきません。しかしそれが「象徴天皇」としての日々の行いだと悟られていたからこそ真の喜びを私達とともに体現することができたのでしょうか。その様な存在を信仰の世界では「神」と呼びます。「神」はこの五月から「人」となりました。宗教家の端くれとして一連の政治ショーを演出した人たちへ忠告します。あなたたちの行為は「信ずる心」を日本人から失わせる結果になるでしょう。「神」はそれを利用したとたんもはや「神」ではなくなるのですから。

十、働き方改革

働き方改革という錦の御旗が、今あらゆる職場を席卷しているのではないのでしょうか？私は残念ながらその御旗の恩恵にあずかる前に退職してしまったので、その旗が偽勅によって振られている旗なのかどうか検証のしようがないことが心残りと言えます。

小学生の子どもを持つお母さんに、四月から先生の働き方改革で下校時間が大幅に変わった話を聞かされました。改革の趣旨は働き過ぎの先生の労働時間を減らすことにあることは間違いないと思われませんが、結果その小学校がとった具体的な措置は先生が児童と接する時間を減らして、早く下校させることだったのです。文科省の通達をいち早く実行に移したと父兄への説明で校長は胸を張っていたそうです。具体的な時間短縮のやり方はこうです。まずは朝の時間帯。全校生が一堂に集まる集会や、学年一斉の読書時間、漢字ドリルの時間など、授業に入る前のアイドリング時間が全面的に廃止され、そこで一律十五分短縮。下校前の掃除が月曜と木曜の週二回に減少などで一日平均三十分下校時間が早くなったそうです。その分先生が三十分早く児童から解放され、翌日の授業準備に時間を割くことができると言う理屈です。根本を間違えてはいませんか？児童と接触する時間をどうやって長くするかが現場の先生方の最優先課題のはず。休み時間に職員室に戻って一服する時間もない現状の中で、教育効果は児童との接触時間に比例して高まると考えないと、義務教育を担う現場の先生のモチベーションはどこに求めれば良いのでしょうか。

私は会社員として働いた営業時代、デスクにいないことは仕事をしていないことと同義でした。依頼主の課題と要望を知るために会って話して聞き出すことに全精力を使い、依頼主

との接触時間に比例して売り上げが上がると信じて働いてきました。「そんな考えだから働き方改革が必要なんだ」と言われればその通りです。役所の指導が入り始めると「その仕事を受けたらおまえの残業時間がオーバーするから仕事を断れ」と平気で言う上司を見かけようになりました。これが働き方改革の不都合な真実です。

教育効果をより高めるには、児童との接触時間を減らすより会議と上司に提出する書類を軽減する方が先決です。実は書類は誰もまともに読んではいません。チェックを入れるのは上司が自分の権限を誇示するため、書類保管は何かあったときの組織防衛のためです。ここで提案です。会議と書類を廃止すると仕事がなくなってしまう管理職や教育官僚たちは、見識も経験も豊富でしょうから、教育現場に戻って忙しい先生の補助をするというのはどうでしょう。先生も子供も迷惑なだけかもしれません・・・

十一、ありがとう

「私を探し出してくれてありがとう」

中学の還暦記念学年同窓会の受付で四五年ぶりに会った同級生に言われた言葉です。人間六一年も馬齢を重ねていれば数え切れない「ありがとう」のやりとりをしているはずですが、この時の「ありがとう」は私の中でも貴重な「ありがとう」の一つです。

還暦記念同窓会というおめでたい会の開催をすべてのクラスメイトに知らせたい、案内状が宛先不明で戻ってくるのが一通もないようにしたい、と決めてもう一人の女性幹事と送付リスト作りに精を出した結果、ひとりを除いて全ての案内状を戻ることなく送り届けることができました。

送り先が分からなかったその女性は三年の途中に転校してきました。養護園からの通学で卒業後は看護学校に行ったことは覚えていましたが、一緒に過ごした時間が半年あまりだったこともあり、その後親しく連絡を取り合う仲間もなく、いつの間にか数年おきのクラス会の時も探し出す努力を端から放棄していました。四五年前は私達三年三組に存在していたのに、現在の私達三年三組の中には存在していないことになってしまいました。これではいけない。養護園や卒業の時の手書きの連絡先メモはとうの昔にあたっていたので、万策尽きているなか、ダメ元でメモの住所を頼りにネットで地図と電話帳を検索していると、偶然にも同じ名字の家に行き当たりました。ままよとばかりにオレオレ詐欺の電話と間違えられるのを覚悟で電話をしたところ、その方は親戚筋の方で、彼女の連絡先をいともあっさり教えてくれたのです。

彼女は結婚されて北海道で看護師さんをしていました。その北海道からわざわざ一泊二日で宇都宮の会場までやって来てくれたのです。お礼を言わなければいけないのは私達の方です。そして今まであなたに連絡しなかった怠慢を謝らなければなりません。私達が「あなたを探し出した」のではなく、あなたが「私達を探し出して」くれたのです。「私達があ

なたに是非来てもらいたい」という気持ちをあなたが探し出してくれたのです。

「私達の気持ちを探し出してきてくれてありがとう」

本欄初のちょっとしたいい話はここまで。ところでネットを駆使すれば、人の行方も知る事が可能だったのです。これでは個人情報保護法の意味がありません。そもそも個人の情報を一番持っているのは国や市町村です。お上が民から徴収するお金をオレオレ詐欺に横取りされないために個人情報には国が独占する必要があります。だから作った法律。ではないですよ。まあ私は洩れて困る個人情報も詐欺に献上する資産もないのでどちらでもいいのですが。

十二、頭隠して尻隠さず

不正や過ちの隠し事はいつかは必ずしつぽを出すはず。

説得は丸め込むことの言い換えです。虚偽はばれないかぎり虚偽とはなりません。厚顔無恥・鉄面皮も押し通せばリーダーシップにみえてきます。事実を再編集すると都合のいい真実を作りだすことができます。不都合な真実は知らぬ存ぜぬでいずれ忘れ去られます。撤回すればなかったことになります。「不安を払拭できた」は「事実を隠蔽できた」と同じ意味です。事実ではなく事実の印象操作が重要です。「反省して陳謝する」は「俺は悪くない、部下のへまに立場上頭を下げただけ」と聞こえます。

不正や過ちの隠し事がばれそうなき、人は言い訳をして何とかその場を凌ごうとします。でも悲しいかな大概の人は言い訳をするその顔や口ぶりが、すでに「済みません。皆さんの思っているとおり、私が悪うございました」と語っているのです。だから不幸なことにしつぽを出してしまつたら、第三者にそのしつぽを引きずり回される前に自ら頭を出して謝罪することです。そして解決策を提示し過ちを清算し再建のための計画を公表することです。私はこれが「リスクマネジメント」だと思っていました。しかしそれがリスクだと認識するからマネジメントするものなのですが、周りがリスクだと思っても当事者がそう思わなければそもそもリスクはリスクとして存在しないことになってしまいます。

私はこの日本はリスクの一切存在しない素晴らしい国だと思っています。尻も頭も全てさらけ出しているはずなのにその様な事実は全くないと言い張るノーリスクの国日本。年金だけでは老後生活できないリスクも日本の船が攻撃を受けるリスクも、それは国民だけがリスクと想っただけで、権力も頭脳もお金もなにもかも持っている人たちに「ノーリスク」と言われると、いつの間にかそんなリスクはどこにもない信じ込まされています。本当かなと思ってもありとあらゆる手練手管、説得術、はぐらかし術、催眠術、幻術、めくらまし、恫喝、強弁、開き直りで迫られると、私だけでなくても「まあ、いいか」となつてしまします。日本は将来にわたつて生活も国の安全も経済成長もノーリスクの国なのだと言う催眠術の中で眠っていた方が楽なのですから。

このままノーリスクの中で眠っていらればいいな。と心から思います、次に自分が生き

ている間だけでもそうであればいいと思うでしょう。死んでしまえば後は野となれ山となれです。その様な心情を無責任とか人でなしと非難することはやめましょう。それが日本人であり日本国なのですから。身にかかるリスクは頭を安全な処に隠してしっぽをふりしてやり過ぎましょう。

十三、嵐 退散！

ジャーナリズムは社会的に多くの影響力を持っているため「立法」「行政」「司法」の三つの権力とともに「報道機関」を第四の権力と呼んでいます。権力のひとつであるということはある権力意志を行使する立場に立って、事実を取捨選択・編集して伝えていくものでしょう。しかしそれでは偏向報道、御用報道のそしりを免れないので、日本では報道機関は一応、公平中立を基本的な立場としています。というような教科書的な建前はさておき、このところのNHKのニュースは楽しいですね。

一月二七日夜七時のトップニュースは「あらし たいさんー」耳から入った音声で「どの嵐がどこから退散したの?」「天気予報は?」と思って画面を見たら、学芸会に等しい歌とともに妙に小綺麗な男の子がタコ踊りともつかぬダンスを踊っている映像が飛び込んできました。チャンネルを間違えた!イヤ、そうではなかった!そいえば彼らの兄貴分の退散のときもたっぷり時間を取って報道してくれた記憶があります。もちろんメンバーの一人が公務執行妨害の容疑で現行犯逮捕されたことも、酒に酔って公園で裸で大声をあげて逮捕されたことも、忬度に長けたNHKは一言も触れていませんでした。最近もカタカナ混じりの名前を持った彼ら角兵衛獅子の元締め死亡報道を長々とやっていました。角兵衛獅子やサーカスの親方は子どもに学校にも行かせず体を柔軟にするために酢を飲ませてばかりいる児童虐待の権化だと思っていたのですが、どうやら時代は変わったようです。

英国の作家スマイルズは「自助論」で「一国の政治というものは、国民を映し出す鏡にすぎない。立派な国民には立派な政治、無知で腐敗した国民には腐りはてた政治しかありえないのです」と述べています。それはそのまま報道や芸能や文化・教育などあらゆるジャンルにも言えることでしょう。だから私はタコ踊りとハモることもできない歌唱をパフォーマンズと呼び、学芸会の演者をアーティストと呼ぶことに何の異論もありません。そして報道機関が嬉々としてそれを私たち国民に伝えることにも何の異論もありません。テレビで報道されている姿が私を映し出す鏡なのですから、異論を唱えたら私は日本国民であることをやめなければならなくなってしまう。

とは言ってみたものの、私はいつまで日本国民を続けられるか自信がありません。私がテレビを見なくなり、新聞を読まなくなるなど自分の鏡になりそうなものから一切目をそむける方が先か。私の目の中を吹き荒れる四つの権力の嵐が退散する方が先か。答えは自明です。権力は自ら退散するはずがありませんから。

十四、六道輪廻

NHKニュースではじめて知って驚き同時に滑稽に感じたことがあります。仏教の教えでは人間のお墓にペットと一緒に埋葬することができないそうなのです。家族同様に暮したペットが亡くなった時、いずれ自分が入るであろうお墓にお寺から埋葬を断られた男性がともつらそうに画面の中で語っていました。

ペットが人間と同じ墓に入れない理由として、畜生は六道輪廻を抜け出すことができません。浄土には行けないからなのだそうです。ある宗派の教えに従っていれば人だけは必ず浄土に行けるので、浄土(墓の中)に人間と畜生が同居するなどあり得ないと言うことがその宗旨のようです。この世に生きるすべてのものは「地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人、天」の六道の世界に生と死を何度も繰り返してさまよい続ける。これが六道輪廻です。そしてその輪から抜け出すことを「解脱」と言うのです。これは仏教の教えの基本中の基本。この基本に忠実に従えば人はもちろん餓鬼も畜生もいずれは解脱して成仏する可能性があるわけです。つまり浄土に行くことができるのです。ですから僧侶の私は、この問題がなぜ問題なのか全く理解できません。それとも私はお釈迦様の教えを誤って受持している、名ばかりの僧侶なのでしょうか。

ニュースは続いて、お寺の元締め役所のような所で顧客(檀家)の現実的な要望に合わせて何とかペットと人が同じ墓に入ることができないか、経を一字一句確かめている場面を報じていました。そしてそれらしい文言を経の中に見つけたらしく、そのことを得々として、宗派の研究会らしきところで説明をしていました。ニュースの内容はだいたいこんな所だったでしょうか。ペットと人間が同じお墓に入ることができるというお墨付きがその宗派のお役所から出たと言うことでしょうか。これで、一件落着。顧客満足が得られなければビジネスはいずれ立ちゆかなくなります。宗教がビジネスであるならば大変賢明な判断だと思います。

宗教家は自分の眼で観て考えてそして行う人たちのこと。そしてその根底にあるものは慈悲です。私はこの一連のニュースをとて滑稽に感じました。経に書いていないからダメ、ダメと書いていないからヨシ。この文言はこう読んだらダメ、でもこう読んだらヨシ。偉い人がヨシと言ったからヨシ、ダメと言ったからダメ。今まではダメだったのであなたの苦しみも悩みにも応えられません。でもお墨付きが出てダメなものがヨシとなったのでこれからあなた方の要望には応えられます。慈悲深き仏さまに感謝しなさい。要約すればこういうこと。これでは指示待ち・杓子定規のお役人さんみたいです。あなたたちは宗教家ですか？

十五、表現と表現者

今回は「狂言綺語」の物分り良い僧侶から「海底に月を撈う」の小言幸兵衛に変身します。

ありのままに観ることばかりを心がけていると息が詰まることばかりの今日この頃。たまにはあたりかまわず難癖をつけてリフレッシュです。聞き苦しく反倫理的小言などもあるかもしれません、その節はご容赦ください。

表現は表現者の行為に社会的責任を負うべきか否か。

「世界に一つだけの花」という国民的な楽曲があります。令和の首相談話で取り上げられ紅白でも歌われているので皆さんご存知だと思います。学校音楽の教科書に採用され、四年生の道徳の教科書には歌詞を提示して「自分を大切にする心」などのテーマを児童に考えさせる教材となっています。この作者は先日覚醒剤取締法違反で逮捕されました。またこの曲を発表する四年前にも同容疑で逮捕され懲役一年六月、執行猶予三年の有罪判決を受けています。昨年麻薬取締法違反で女優が逮捕されました。お陰で大河ドラマが撮り直しとなり放送開始が大幅に遅れました。このように表現者（アーティスト・芸人・役者・芸術家など）の薬物犯罪は事欠きません。その時に必ず出てくる問題は表現者の表現をどう扱うかです。大概は薬物のみならず不祥事（不倫でさえー）を起こした芸能人が出演しているテレビ、映画、音楽、コンサートなど出演している作品がいずれも放送・販売が中止となります。なぜでしょう。子どもに悪影響を与える、社会モラルに反する人間を公共の電波などで流すことは視聴者が納得しないから？

戦後すぐヒロポン（覚醒剤）中毒が社会問題となりました。作家の坂口安吾や織田作之助がヒロポン中毒だったことは周知の事実です。太宰治の小説にはモルヒネ（麻薬）の話が良く出てきます。彼自身も中毒だったのではという話もあります。彼らの小説が日本文学全集から削除されたという話は聞いたことはありません。文学はすぐれた日本文化だから大切にすべきで、芸能は低俗だから文化的価値がないというような選別がもしあるとすればこれは精神と文化の「死」をもたらすでしょう。

表現には低俗・高級も価値・無価値もありません。表現は生み出された瞬間から表現者のものではなく表現自身のものです。その瞬間表現者とはなんの関係もなくなくなります。犯罪は表現者自身がその責めを負えば良いだけで、表現に手錠をかけることは表現の「死」です。表現はそれが存在している限り自由で等価でなければなりません。それを人の感情や社会的規範で処断することは私たちの表現（生きること）を不自由にし等級付けをしていずれば「生きること」に「死」をもたらすことになるでしょう。

十五、ダブルスタンダード（二重規範）

類似した状況に対してそれぞれ異なる指針が不公平に適用されることをダブルスタンダード（二重規範）といいます。二重規範と思われる言動を私たちが行くと、えこひいき、不公平、嘘つき、二枚舌、などと非難されます。ですから私たちは二重規範を卑怯者、反道徳

的な言動として蔽に自戒して暮らしています。

ただ二重規範が公に認められその行使は大衆の統治と操作のための有効な手段として白昼堂々と行使できる人たちがいます。国会中継を見て下さい。補助金詐欺、獣医学部設立認可、大学入試改革や桜を見る会、検事の定年延長など忖度と公文書改ざん、法律のお手盛り解釈、とダブルスタンダードのオンパレードです。補助金詐欺の当事者が最近実刑判決を受けました。私が見たところ馬鹿正直に一人だけ真実を語っているように見えたがその人は有罪で、文書改ざんも何もかも知らぬ存ぜぬ、部下がやったこと、すべて適法に処理したと強弁した人たちは不起訴どころか今でも同じ椅子に座って同じように見えましたがそのしています。テレビから流れる情報もダブルスタンダードのオンパレードです。例えばマスコミは「世界に一つだけの花」について、表現者が犯罪人であればその表現も手錠をかけられるべきだとの立場をとれば、この楽曲はこれからも一切放送しないし教科書からすべて削除すべしと主張するはずです。逆の立場であれば表現に罪は存在しないという主張をしっかりとしていくべきです。人や影響度によって恣意的に基準を変えるといずれその報道は信用されなくなります。視聴率や新聞購読率の低下そして選挙投票率の低下は二重規範を行使する権力に対する国民の信頼の低下を表す数字です。

残念ながら私は立法・行政・司法・マスメディアという四つの権力のどこにも関われない毎日過ごししているので、無駄な正義感を振りかざしても隔靴搔痒、お腹がすいて血圧も上がりいいことは何もありません。ただ心配なことがあります。国会やテレビで平然と二枚舌を駆使している人たちにも両親や奥さんお子さんがいるでしょうに、その方たちが近所で「馬鹿息子をご迷惑をかけて、育て方を間違えたか」「家では家事を手伝うよい夫なんです」「お前のとうちゃん閻魔様に舌を抜かれるぞ」など謝罪や言い訳に追われいじめに遭っていないければ良いのですが・・・

つい最近まで「お天道さまがすべてお見通し」「お天道さまが許してもこの桜吹雪が許さない」と二枚舌を戒めていましたが今のお天道さまはすべて許してくれるようで皆やりたない放題。この下界の出来事に無関心なのか、あまりの放埒さに匙を投げたのか。日本がお天道さまに見捨てられていないことを願うばかりです。